

アンチ・ドーピング教育に関する一考察

A study on anti-doping education

1K09B064-1

指導教員 主査 友添秀則 先生

桐谷晃平

副査 深見英一郎 先生

【目的】

現在、スポーツは人々の生活に欠かせないものになっている。しかし、スポーツに関わる問題として「ドーピング」が挙げられる。そして、ドーピング防止には、アンチ・ドーピング教育による、ドーピングに関する正しい知識と理解が不可欠である。しかし、日本ではドーピングの関心が薄く、アンチ・ドーピング教育があまり行なわれていないようにも思われる。学校教育においても、高等学校学習指導要領にドーピングが取り上げられはしたが、まだまだ十分ではないとも言えるだろう。

そこで、本研究では、日本におけるアンチ・ドーピング教育普及のための課題を明らかにすることを目的とする。そのために、まずはドーピングの歴史、禁止された背景を明確にしていく。その上で、WADA・JADA が行なっている、アンチ・ドーピング教育の取り組み、両者の違いを考察する。これらを踏まえ、日本におけるアンチ・ドーピング教育の現状を調べ、アンチ・ドーピング教育普及の課題を考察していく。

【方法】

本研究は、文献および関連ホームページを参考・引用する文献研究である。特に、アンチ・ドーピング教育に関する諸論文、WADA および JADA の資料を主な考察対象に据える。

【結果】

ドーピングは古代から行なわれており、近代に入り、スポーツの場において使用されることになったという経緯が見て取れた。ドーピングも進化を続け、当初の興奮剤などの薬物から血液を用いることとなり、更には遺伝子操作によるドーピングも懸念されている。また、ドーピング使用によるスポーツ中の事故が問題視されるようになり、アンチ・ドーピング活動が展開されることとなった。しかし、WADA をはじめとし、国際的にアンチ・ドーピング活動が始まったものの、規制と規制をかいくぐろうとする選手との「いたちごっこ」は続いている。

WADA では、アンチ・ドーピング教育促進のために教育ツールやアウトリーチモデルを作成している。また、ドーピング防止として科学的研究を行なっており、貢献した研究者に賞を与えるなど、ドーピング防止に積極的に取り組んでいる。JADA では、研究会やアウトリーチプログラムを多く実施している。その実施回数も年々増加しているが、主な対象者は競

技者であった。スポーツ界においては、WADA、JADA によってアンチ・ドーピング教育が行なわれ、普及してきた。しかし、どちらにも今後改善が求められる点が推察できた。

アンチ・ドーピング教育の現状としては、依田らの研究によれば、競技者が主な対象者であり、全体としてもアンチ・ドーピング教育を受けたことのある学生は約 25% と少ない値であった。また、アンチ・ドーピング教育の一定の有効性も見られた。このように、依田らの研究にのみ限定すれば、現状は普及しているとは言えないが、教育の有効性、必要性を再認識することができた。

そして、今後普及していくための課題として、義務教育段階でのアンチ・ドーピング教育の導入やスポーツを支える一般の人への教育が挙げられる。また、WADA・JADA においてもより積極的な活動の継続が求められる。

【考察】

アンチ・ドーピング教育の現状は、十分に行われているとは言えないだろう。これは、競技者や競技者関係者を主な対象として、アンチ・ドーピング教育が行われているからだと考えられる。また、現行学習指導要領にドーピングが含まれなかった理由としては、アンチ・ドーピング活動体制が十分に出来ていなかったことがあろうであろう。しかし、今回の学習指導要領改正によって、学校教育にドーピングが学習内容に含まれた。この背景には、スポーツ基本法にドーピングに関する記述が見られたことが挙げられる。それだけ、スポーツの中でドーピングが問題になっているとも言えよう。

さらに、中学校段階におけるアンチ・ドーピング教育の導入が可能であるかを検討すること、そして導入する場合、どのように導入するか、特に高等学校との接続を考慮し、検討する必要がある。また、すでに導入されている高等学校の体育教師のドーピングについての理解度を把握も必要である。